

S. タールベルクが後期ロマン派のヴィルトオーズ音楽に与えた影響 — F. リストとの関係と《モーゼ幻想曲 作品33》に着目して —

方 丈 響 子

S. Thalberg's Influence on Late Romantic Virtuoso Music : Focusing on the Relationship with F. Liszt and the “*Fantasia of Moses, Op. 33*”

Kyoko Hojoh

(2022年12月12日受理)

1. はじめに

ジギスモント・タールベルク（1812-71）は、同時代のショパン、リストと並んで、19世紀に活躍したロマン派のピアニスト・作曲家である。ヴィルトゥオーゾ・ピアニストとして名声を確立し、最前線を歩んだタールベルクは、19世紀のピアノ音楽の発展に大きく貢献した。それと同時に、タールベルクを語る上で欠かすことができないのがリストの存在である。リストにとってタールベルクは、人気・実力ともに当時最大のライバルであったといわれ、後に有名な「タールベルクとリストの対決」が行われることになる。

なぜそれほどまでにリストがタールベルクをライバル視したか、その理由は、タールベルクによって用いられた新しいピアノ書法にあると考える。タールベルクの特徴の一つに「タールベルクのハーブ」があるが、これは、鍵盤の全音域をハーブのように響かせながら中声部に旋律を浮き出させる技法であり、その様は「三本腕」と呼ばれた。ゴランツ（1974）、香川（1990）、岡田（2007）は、「タールベルクのハーブ」について、アルペジオの中に両手の親指を交互に使い旋律を奏でる¹⁾としている。また、香川（1990）は、「三本腕」のトリックについて視覚的效果から分析し、左手の旋律が聴衆の側から見えないことが「三本腕」と呼ばれる理由²⁾としている。このような背景から、タールベルクの作品を分析する過程において、リストの存在や、タールベルクの特徴を示す「タールベルクのハーブ」、「三本腕」が重要になると考えた。今日では、彼の作品を耳にする機会は減多になく、同時代に活躍した作曲家の影に埋もれてしまっているが、これまでの音楽界・ピアノ界に、彼がどのような影響を及ぼしてきたかを追求したい。

そこで本研究では、タールベルクとリストの対決の中

でも演奏され、「タールベルクのハーブ」が用いられた《ロッシーニの歌劇「エジプトのモーゼ」による大幻想曲 作品33》（以下、モーゼ幻想曲）を中心に取り上げ、リストとの因果関係を歴史的背景より探る。また、「タールベルクのハーブ」、「三本腕」の根拠について分析し、本作品にみられる特徴や構成を明らかにすることを目的とする。

2. タールベルクとリスト

タールベルクとリストは比較されることが多い。表1に示すとおり、タールベルクと同じ年代には、ショパンやリストなどヴィルトゥオーゾと呼ばれるピアニストが名を連ねた。特に、超絶技巧を得意とするリストと比較され、当時の人気を二分していた。

表1 タールベルクと同時代のピアニスト

人 名	生まれ	出身地
ショパン	1810年3月	ポーランド
リスト	1811年10月	ハンガリー
タールベルク	1812年1月	スイス

タールベルクがパリへ赴いた1835年、リストはスイス旅行のため、パリを不在にしていた。その間の翌1836年、タールベルクはパリで大成功を収め、リストに匹敵するヴィルトゥオーゾ・ピアニストとして認められるようになる。このタールベルクの活躍に対し、リストは1837年1月8日の『ガゼット・ミュージカル』において、

タールベルク氏の幻想曲は、もっとも明白な偽りであることをあきらかにしています。というのも、うぬぼれた、もっとも空虚で凡庸な作品であるばかり

でなく、まったく単調であるがゆえに完全に退屈以外の何ものでもないことがわかるからです。³⁾

といったタールベルクの作品を酷評する著作を発表した。この問題の著作は、リストにしてはめずらしく攻撃的な内容で、タールベルクという存在に彼が過敏に反応したことを示している⁴⁾。同年1月下旬、リストは自らの音楽に対する姿勢を明示するかのよう、ベートーヴェンの室内楽曲の連続演奏会を始めた(表2)。

表2 タールベルクとリストの演奏会記録(1837年1月~3月)

1月28日	リスト	ベートーヴェン室内楽曲の連続演奏会(全4回)
3月12日	タールベルク	《モーゼ幻想曲》他 パリ音楽院ホール
3月19日	リスト	《ニオベ幻想曲》他 パリオペラ座
3月31日	二人の競演	《モーゼ幻想曲》(タールベルク) 《ニオベ幻想曲》(リスト) 《ヘクサメロン》※ (タールベルク・リストによる合作)

※実際には演奏していない

同年3月12日、タールベルクは400席ほどのパリ音楽院のホールで演奏する。曲目は新作の《イギリス国歌の主題による大幻想曲 作品27》と、人気作品《モーゼ幻想曲》であった。超絶技巧に加え、洗練された優美な変奏手法や、「三本腕」と呼ばれるようになる新たな作曲技法が盛り込まれたタールベルクの演奏に対抗し、リストは3月19日、3000人以上の集客能力のあるパリオペラ座にて演奏会を行う。当時は、流行しているオペラのアリアをピアノ独奏曲用に編曲し、腕前を披露する習慣があった。リストは、パチーニのオペラ《ニオベ》の“君の胸のときめき (*I tuoi frequenti palpiti*)”に豪華な装飾を施し、主題(譜例1)を巧みに変容させた《ニオベ幻想曲》[S419](譜例2)とウェーバーの《ピアノと管弦楽のための小協奏曲》を披露した。

譜例1 “I tuoi frequenti palpiti” 主題



譜例2 リスト《ニオベ幻想曲》



1月28日に端を発する短期間の演奏会により、大衆は両者が直接同じコンサートステージで共演し、両者のテクニックを競い合う(対決する)機会を求めるような気運が高まった。その対決の実施に一役買ったのがクリスティナ・トリヴルツィオ・ベルジョイオーソ侯爵夫人(1808-71)である。イタリアの侯爵夫人であるベルジョイオーソは、文化的貢献とイタリアの統一運動に貢献したことで知られる。芸術家との交流も多く、リストと1830年代から交流があったベルジョイオーソは、同年3月31日、自身のサロンで二人を演奏させた。これが音楽史に残るタールベルクとリストの直接対決(競演)の実現である。当日は、まず何人かの音楽家による前座があったのち、タールベルクが《モーゼ幻想曲》を演奏し、次いでリストが《ニオベ幻想曲》を弾いた⁵⁾。当時のパリは音楽の中心でもあり、特に、政治家や貴族の社交の場であるサロンから音楽を発信することは、若きピアニストにとって重要な接点の場であった。この歴史的なヴィルトオーズ対決によって、サロンが歓声に湧いたことは容易に窺える。

両者の対決の結末について、ベルジョイオーソ侯爵夫人の発言が取り上げられることが多いが、賛否両論の評価がある。この二人の対決について福田(2005)は、「4月3日の『デバ』誌に批評家ジュール・ジャンナは「ふたりが勝利者であり、敗北したものはいなかった」と報告している」⁶⁾と記している。

競演のきっかけとなった作品は《ヘクサメロン》(Hexaméron, Morceau de concert) [S.392]であり、リストの呼びかけによって6人の作曲家(タールベルク、ピクシス(1788-1874)、エルツ(1803-88)、ツェルニー(1791-1857)、ショパン)が共作したピアノ曲である。ベッリーニのオペラ《清教徒》の“清教徒の行進曲”から採られた主題と6つの変奏、変奏曲のつなぎにあたる間奏部、フィナーレで構成される。タールベルクが作曲した第1変奏は、華麗なパッセージによって主題が彩られ、中音域に旋律を配置するという彼のピアノ書法が存分に発揮されている。リストによる第2変奏は、*Moderato*で奏でられるため超絶技巧的でないものの、第2変奏のほか、序奏、間奏部、フィナーレはリストが作曲し、この時代のヴィルトオーズたちの様式を伝える作品として華やかにまとめられている。もともとは、タールベルクとリストが競演する機会を作ったベルジョイオーソ侯爵夫人が、二人の対決の目玉として依頼した作品であった。しかし、《ヘクサメロン》の完成は3月31日に間に合わず、その演奏会で実際に演奏されることはなかったが、それ以後リストの演奏会では欠かせない人気曲目となった。

3. 《ロッシーニの歌劇「エジプトのモーゼ」による大幻想曲 作品33》について

本章では、《モーゼ幻想曲》を用いてタールベルクの作品の特徴を考察する。

《モーゼ幻想曲》は前述のとおり、1837年3月31日、「タールベルクとリストの対決」でタールベルクが演奏した曲である。19世紀には人気オペラの旋律によるピアノ超絶技巧曲が多数作られた。《モーゼ幻想曲》もそうした系列の一曲で、1839年に出版され、19世紀を通して演奏会でしばしば取り上げられる有名作品となった。後にシューマンの妻となるクララ・ヴィークもこの作品を研究した。オペラ《エジプトのモーゼ》は、アンドレア・トットラ作詞の4幕物で、物語は聖書から取られ、パロとユダヤ人との闘争を題材とするものである。冒頭は、オペラでも序奏にあたる“*Chi ne aiuta! Oh ciel!*”が再現されており、弦楽器によって何度も繰り返されるフレーズを思わせる（譜例3）。

譜例3 序奏

FANTASIE.

S. Thalberg, Op. 33.



46小節からはシンプルな伴奏・旋律が一貫して歌われ、徐々に装飾され展開していく。曲の後半(239~314小節)は、《エジプトのモーゼ》で最も有名な「モーゼの祈り」の場面であるアンサンブル“汝の星をちりばめた玉座に(*Dal tuo stello soglio*)”が忠実に再現されている。後半部分にあたる譜例4~譜例6は、“*Dal tuo stello soglio*”の旋律を取り巻く装飾や伴奏の変化について、一部抜粋し、まとめたものである。ト短調で提示される主題（譜例4）は、左手の伴奏の音域の中で浪々と歌われ、曲が進むにつれて音域も広がりをもせる。

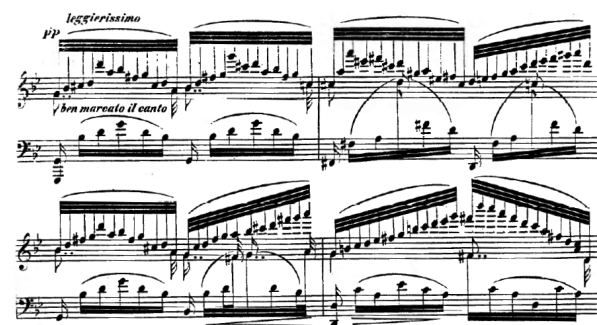
第1変奏（譜例5）では、右手の音階的な装飾パッセージが、両手の親指でとる旋律より高い音域で奏でられる。右手の装飾パッセージが全音域に跨っていないため、先に述べた「タールベルクのハープ」の定義に完全には合致しない。しかし、視覚的側面からみると十分に「三本腕」に該当することから、第1変奏は「タールベルクのハープ」の手法の一種といえるだろう。装飾音には *pp* かつ *leggierissimo*、旋律は *ben marcato il canto* の指示があることから、装飾音の繊細な響きの中で旋律をはっきりと表情豊かに歌う必要がある。音色の区別による声部の弾き分けはもちろんであるが、それにより流れが失

われないように留意する必要がある。装飾音によって旋律を紡いでいくイメージをもつことが望ましいだろう。

譜例4 “*Dal tuo stello soglio*”主題(245~253小節)

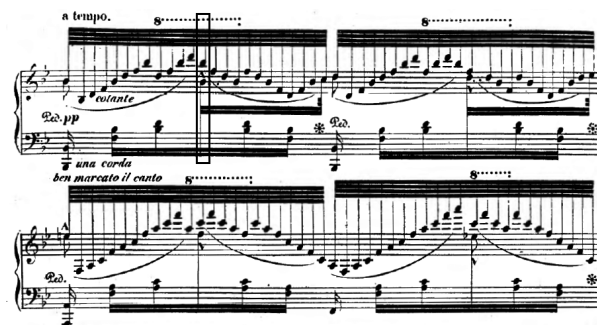


譜例5 第1変奏(259~267小節)



譜例6は、主題が平行調へと転調し、「タールベルクのハープ」、「三本腕」の手法が最大限に用いられる部分である。旋律と伴奏の二つと同時に鍵盤上を上へ下へと駆け巡る4オクターブのアルペジオは、聴衆を圧倒した⁷⁾。この後さらにト長調へと転調し、厚みを増した和音とともに盛大に主題が奏でられ、曲が締めくくられる。

譜例6 タールベルクのハープ・三本腕(288~308小節)



4. 三本腕の特徴と実践的検証

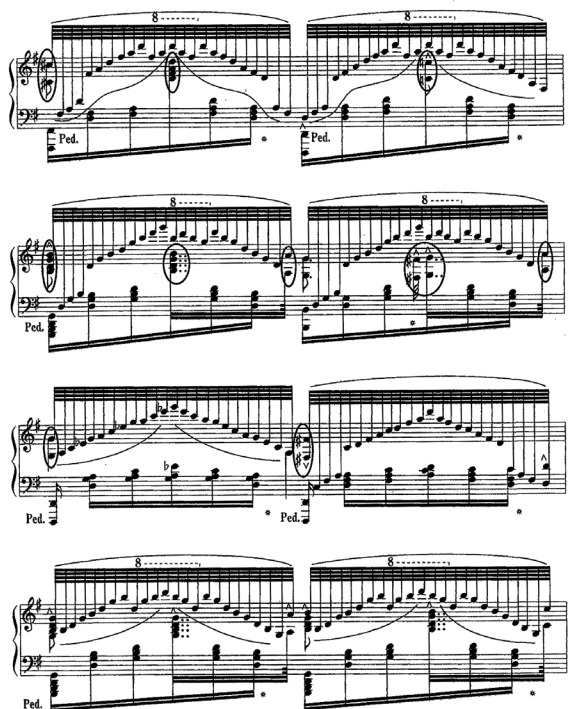
(1) 三本腕の特徴

当時の著名な批評家・作曲家であり、保守的な批評で知られるフェティスは、ピアニストには二つの流派があり、ひとつはショパンに代表される歌うピアニズム、もうひとつはリストに代表される絢爛たるピアニズムであ

ると分類している。タールベルクは、この双方の流派を結びつけた新しいピアニストであると評した⁸⁾。

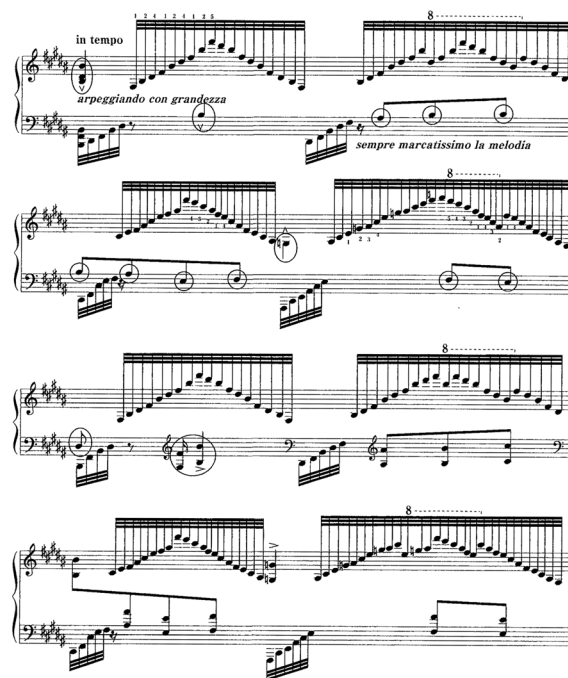
ピアノ書法において、手の機能はしばしば右手と左手で役割が分担されており、左手は伴奏、右手は旋律もしくは旋律・伴奏という役割を果たした。タールベルクの演奏技法の新しさの本質は、左右の手の機能を伴奏・旋律にわけず、旋律を中声部においてそれを取り巻くようにアルペジオの伴奏を配置することで、旋律・伴奏の両方を左手・右手で交互に取り合うというものだった⁹⁾。このような発想は、J.S. バッハのような多声部の作品に由来するものとも考えられるが、超絶技巧が発展する19世紀中旬にタールベルクがこの手法を多用したことで、その後の作曲家にも影響を与え、作曲手法の幅を広げたと考えられる。また、「タールベルクのハープ」を奏するための「三本腕」技法は、リストとの対決で演奏した《モーゼ幻想曲》によって確立された¹⁰⁾。興味深いのは、その後のリストの楽曲にも「タールベルクのハープ」と見られる手法が用いられていることである。譜例7および譜例8は、タールベルクとリストの楽曲を比較分析した貴重な資料である。譜例8のように、リストの《ノルマの回想》のクライマックスにも、タールベルクの《モーゼ幻想曲》を思わせる長大な「タールベルクのハープ」のPassageが一面に散りばめられていることがわかる。

譜例7 タールベルク《モーゼ幻想曲》



出典：伊藤信宏（編）『ピアノはいつピアノになったのか？』
大阪大学出版会 p. 189より一部抜粋

譜例8 リスト《ノルマの回想》



出典：伊藤信宏（編）『ピアノはいつピアノになったのか？』
大阪大学出版会 p. 194より一部抜粋

さらにリストは、「タールベルクのハープ」の手法を、《コンサート・エチュード》[S144]の第3番「ため息」にも取り入れている（譜例9）。

譜例9 リスト《コンサート・エチュード》第3番「ため息」



出典：園田高弘、諸井誠『ロマン派のピアノ曲／分析と演奏』
音楽之友社 p. 240より一部抜粋

前述のとおり、「タールベルクのハープ」は、競演したリストに影響を与えた。園田（1984）によると、この手法はリストだけでなく、ショパンやラフマニノフ、スクリャービン、プロコフィエフにも影響を与えた¹¹⁾という。譜例10および譜例11はその一部だが、ショパンの《前奏曲 作品28》やラフマニノフの《前奏曲 作品23》のような有名作品の中にも類似した技法が取り入れられていることがわかる。ショパンの《前奏曲 作品28》の作曲時期は1831-38年と諸説あるが、川口（2022）は、ショパンとタールベルクが1830年にウィーンで出会い、その頃に作曲されたタールベルクの作品を聴いたのではないかと¹²⁾と述べている。同時代を生きた作曲家も少なからず影響を受けたのではないだろうか。タールベルクのピ

アニズムは、19世紀中甸の超絶技巧が発展する時代に貢献し、《星条旗よ永遠なれ》を編曲したホロヴィッツ(1903-89)など、現代のヴィルトゥオーゾたちもこの影響を受けている。

譜例10 ショパン《前奏曲 作品28》



譜例11 ラフマニノフ《前奏曲 作品23》



出典：園田高弘、諸井誠『ロマン派のピアノ曲／分析と演奏』
音楽之友社 p. 240より一部抜粋

(2) 三本腕の実践的検証

前述のとおり、香川(1990)は、左手の親指で弾く旋律が、右手のアルペジオの死角になって、聴衆側から見えないということが「三本腕」のトリックと主張している。そこで筆者は、香川の主張する「三本腕」のトリックについて実際に検証した。検証方法は、「三本腕」に該当する「タールベルクのハーブ」の箇所を実際に弾き、その様子を固定されたカメラで撮影するという方法である。図1および図2は、撮影した動画の静止画で、譜例6の四角で示した音を切り取ったものである。図1は上から、図2は聴衆側からのアングルとして、左手の親指で弾く旋律の様子を2パターン撮影した。

図1 上からのアングル



図2 聴衆側からのアングル



検証の結果、たしかに左手の旋律が右手のアルペジオによって死角となり、香川が主張する聴衆側(ここではカメラ側)には左手の親指が見えなかった。つまり、「タールベルクのハーブ」は譜例6で示すとおり、伴奏・旋律・アルペジオの構成だが、旋律を奏でる左手の親指が見え

ないにもかかわらず、その死角から旋律が聴こえることが「三本腕」のトリックとなる。

5. 考察

本稿では、「タールベルクのハーブ」が用いられた《モーゼ幻想曲》を中心に取り上げ、リストとの関係を歴史的背景から探った。また、「タールベルクのハーブ」、「三本腕」の根拠について分析及び実践的検証を行った。

1830年代、ヴィルトゥオーゾ・ピアニストとしてその最前線を歩んでいたタールベルクは、超絶技巧を得意とするリストと比較され、当時の人気を二分していた。タールベルクの活躍は、リストがパリを不在にしている最中の出来事であり、ピアニストとしての地位転落を危惧したリストがすぐにパリへ引き返したことから、タールベルクに対し、いかに強いライバル意識を抱いていたかがわかる。二人は短期間に幾つもの演奏会を開き、共に25歳の1837年3月、音楽史に残る二人の対決が実現したが、数々の文献でリストの心情について触れられる一方で、タールベルクがリストをライバル視していたかは明らかになっていない。しかし、この対決がヴィルトゥオーズ音楽の最盛期であるロマン派時代のパリを沸かせ、さまざまな作曲家のその後の作風の変化から見ても、後世の音楽に影響を与えたことはたしかであり、リストとの関係が、タールベルクが人気を博す一助となったことは否定できない。

「タールベルクのハーブ」を奏でるための「三本腕」技法は、リストとの対決でタールベルクが演奏した《モーゼ幻想曲》によって確立した。これまでのピアノ手法における手の機能は、対位法を用いた作品を除き、左手は伴奏、右手は旋律(もしくは旋律・伴奏)と分担されていたため、超絶技巧を兼ね備えたこの新しいピアノ書法は、リストやショパン、ラフマニノフなど、多くの作曲家へ影響を与え、続く世代の典型的なピアニズムとして定着させた。左右の手の機能を伴奏・旋律にわけず、旋律を中声部においてそれを取り巻くようにアルペジオの伴奏を配置し、旋律・伴奏の両方を左手・右手で交互に取り合うという当時前例のなかった彼のピアニズムは、音楽界に革新をもたらしたといえる。

また、香川氏が主張している「三本腕」のトリックについて検証した結果、図1のように左手の親指で弾いている旋律が、図2の角度になると右手のアルペジオの死角になり、聴衆側(今回はカメラ側)からは見えなかった。《モーゼ幻想曲》における「タールベルクのハーブ」は、譜例6に示すとおり、左手の伴奏・左右で交互にとる旋律・右手のアルペジオの3つ役割で構成されている。旋律を奏でる左手の親指が見えないにもかかわらず、その

死角から旋律が聴こえることが「三本腕」のトリックであることを実証することができた。《モーゼ幻想曲》は、聴覚的に3本の腕で弾いているように聴こえるだけでなく、視覚的效果による「三本腕」にも該当することが確認できた。タールベルクの超絶技巧は、まるで三本腕で弾いているかのような視覚的な効果も相まって、聴衆を惹きつけていたことが理解できる。

6. おわりに

本研究では、《ロッシーニの歌劇「エジプトのモーゼ」による大幻想曲 作品33》を中心に取り上げ、リストとの因果関係、そしてタールベルクの最大の特徴ともいえる「タールベルクのハープ」、「三本腕」について検証し考察した。その結果、《モーゼ幻想曲》の後半部分に「タールベルクのハープ」、「三本腕」の技法が多用されており、「三本腕」の実践的検証を行うことで、「三本腕」の根拠の一つが視覚的效果によるものであることが明らかになった。タールベルクが示した新しいピアノ書法は、当時のピアノイズムに革新をもたらし、後世の音楽を発展させるきっかけとして、重要な位置づけにあった。しかし、音楽界に多大なる影響をもたらし、それほどまでに活躍したはずの作曲家の作品が、現代であまり知られていないことには疑問が残る。

今後の課題として、リストとの対決後の1840年以降、タールベルク作品の推移と変遷について研究し、現地調査を視野に入れながら、やがてタールベルク作品が衰退することとなる因果について追求していきたい。

なお、本研究は、JSPS 科研費20K12901の助成を受けたものである。

引用文献

- 1) 方丈響子「S. タールベルクのピアノ作品における一考察—《イギリス国歌の主題による大幻想曲 作品27》を中心に—」九州公私立大学音楽学会音楽研究第8号、2021年、70頁
- 2) 香川正人「タールベルクにおけるピアノ書法の特徴とロマン派書法に見られるその影響」日本私学教育研究紀要、1990年、367頁
- 3) 福田弥『作曲家◎人と作品シリーズ リスト』音楽之友社、2005年、49頁
- 4) 福田弥、前掲書、50頁
- 5) エヴェレット・ヘルム『〈大作曲家〉リスト』音楽之友社、1996年、96頁
- 6) 福田弥、前掲書、52頁
- 7) 高須博(2009)『タールベルク：超絶技巧オペラファンタ

ジー』PARTENZA RECORDS、PRCC-0002、CD解説(寺内聡著)

- 8) 福田弥、前掲4
- 9) 上田泰史『ビティナ音楽辞典 ジギスモント・タールベルク第1回』解説脚注 http://www.piano.or.jp/report/02soc/19memoirs/2014/08/11_18367.html (最終閲覧2022- 8-14)
- 10) 香川正人、前掲2
- 11) 園田高弘、諸井誠『ロマン派のピアノ曲／分析と演奏』音楽之友社、1984年、239頁
- 12) 川口成彦(2022)「連載 ショパンの窓から10」『音楽の友』音楽之友社、2022年3月、22頁

参考文献

- ・伊藤信宏(編)『ピアノはいつピアノになったのか?』大阪大学出版会、2007年
- ・福田弥『作曲家◎人と作品シリーズ リスト』音楽之友社、2005年
- ・香川正人「タールベルクにおけるピアノ書法の特徴とロマン派書法に見られるその影響」日本私学教育研究紀要、1990年
- ・園田高弘、諸井誠『ロマン派のピアノ曲／分析と演奏』音楽之友社、1984年
- ・エヴェレット・ヘルム『〈大作曲家〉リスト』音楽之友社、1996年
- ・大田黒元雄『歌劇大事典』音楽之友社、1962年
- ・上山典子「オペラ編曲家としてのタールベルク」静岡文化芸術大学研究紀要、2021年
- ・川口成彦『音楽の友「連載 ショパンの窓から10」』音楽之友社、2022年3月
- ・香川正人、長谷川裕恭、阪上雅樹『S. タールベルク 幻想曲集』日本タールベルク協会、1995年
- ・“Niobe (Pacini, Giovanni) : International Music Score Library Project” https://imslp.org/wiki/Niobe_%28Pacini%20C_Giovanni%29 Accessed November 24, 2022.
- ・“Liszt, Franz : International Music Score Library Project” [https://imslp.org/wiki/Grande_fantaisie_sur_des_motifs_de_Niobe,_S.419_\(Liszt,_Franz\)](https://imslp.org/wiki/Grande_fantaisie_sur_des_motifs_de_Niobe,_S.419_(Liszt,_Franz)) Accessed November 24, 2022.
- ・“Thalberg, Sigismond : International Music Score Library Project” https://imslp.org/wiki/Category:Thalberg,_Sigismond Accessed August 14, 2022.
- ・R. Allen Lott. “From Paris to Peoria: How European Piano Virtuosos Brought Classical Music to the American Heartland.” Oxford University Press. 2003